

俺には妹がいる。俺達のような関係を兄妹と呼ぶが、これが女同士の場合は姉妹となる。服や日用品を共有出来たり、同性だからこそ理解し合える部分があつて良いような気がするのだが、どうも『仲の良い姉妹など幻想』というのが現実らしい。俺には妹しかないので想像する事しか出来ないが、兄や弟がいたとして……イメージが難しい。

相性が良ければ仲良く出来る気もするし、それなら性別を問わない気がする。という事は、やはり仲の良い姉妹もいるのではなからうか。

というか、同居している三姉妹は傍目に見ても仲が良いし、他にも身近にその範例がある。

そう——高千穂姉妹だ。

13 戦目

『姉妹の事情』

俺の名前は橘アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

年が明けてもう半月。卒業を間近に控える身だが、その後の進路とかには触れないほしい。なんというか——大丈夫なので。

「——アサトっ」

進学や就職が決まってるとか、留年してもう一年高校生活を送るとか、むしろ何も決まっっていないとか、そういう事ではない。

『大丈夫』なのだ。

「ねえ、アサトってば！」

いわゆる『サザエさん』方式なので、もうすぐリセットが云々かんぬんなのだ。これ以上はメタというよりも野暮なので空気を読んでくれ。

「アーサートー！」

「うるさいぞ。耳元で騒ぐな」

「だって無視するんだもん」

「接客態度がなってない。まずは『お待たせしました』だろうが」

さつきから騒々しいのは此処——『局地戦・改』の店員の少女だ。長い黒髪をポニーテールにしているが、ヤミヒメではない。よく似ているが、年齢が違っし、性格や口調に至っては似ても似つかない。

少女の名前は高千穂やみ子。

ゾイエス学園初等部に通う六年生。

そして高千穂の姓が示す通り、ツバキの姉である。

「あ、そうだった。えっと……お待たせしました！ オムライスをお持ちしました！」

やみ子は指摘されるとすぐに態度を改め、無邪気な笑顔を浮かべてそう言うと、手にしたトレイから注文の品を俺の前に置いた。香りと色味が食欲をそそるオムライスである。

ちなみに今日の厨房はタオエンの担当なので味は保証済みだ。

「なんて書く!?!」

ケチャップの容器を手にして瞳を輝かせる小学生店員——やみ子。敬語は長続きしないらしい。

『魅魅魅』で頼む」

「……ひらがなでいい？」

駄目に決まっている。まあ、ひらがなだとしても、オムライスの限られた面積にケチャップで『ちみもっりよう』は難しいと思うが。

『555』じゃ駄目？」

「お前の好きなものだろうか」

某・仮面の変身ヒーローである。平成で言うと四作目か。

特撮ヒーロー作品が好きという点はヤミヒメと同じだ。

「むー……お客様、もつと簡単なのでお願いします」

「判った。じゃあ、『913』で頼む。大きな」

目に見えて機嫌が悪くなってきたので、普通に見えるリクエストに変える。かけてくれれば別になんだったっていいのだ。

「なんだ。『カイザ』⁹¹³が良かったなら、最初からそう言ってくればいいのに」

ちなみに件^{くだん}の作品の2号ポジションで、非常に嫌な奴として有名なキャラが変身する。

「……………」

やみ子がケチャップでオムライスに文字——というか数字——を書いていく。彼女は性格なのか、無駄に動きが大きい。しかも今日はやけに胸元の開いた衣装のため、その豊かな双丘が揺れ、自己主張を繰り返す。高千穂家の血筋なのか、ツバキと同じく小学生とは思えない胸囲を誇っており、つまり姉もロリ巨乳なのだ。

妹と違い着痩せしないようで——この衣装ではそもそも無理だろうが——しかもツバキのようにコンプレックスでもないらしく、あまり気にしている様子がない。なので、このように無防備に、けしからんたわわを衆目に晒している。ほぼ常連しか来ないような店内だからいいが、女子小学生にこんな格好をさせていいの不安になる。色々な意味で。

「や、やみ子さん！ そんなに前屈みになると、その……………」

青少年健全育成法とか大丈夫なのかと店の心配をする事で煩惱を振り払っていると——べ、別にロリ巨乳とか興味ないんだからね（無駄ツンデレ）——別の店員が慌てて駆け寄ってきた。

ツバキである。彼女も今日は普段の和服エプロンではなく、袴^{はかま}系の衣装を着ている。コスプレで接客する日らしい。

「え？」

ツバキの様子にやみ子がはつとなり、目の前の俺に視線を向ける。若干だが頬に赤みが差している。

ラブコメであれば『アサトのえっち！』とか言われた上で殴られたりするシチュエーションだが、やみ子は少しはに..かん..ただけで、ツバキの方を向いた。

「ツバキ。今日は『お姉ちゃん』って呼んでくれる約束でしょ？」

「あ、はい.....お姉ちゃん——」

もじもじと消え入りそうな声で、言われた通りにやみ子を『お姉ちゃん』と呼ぶツバキ。いつも大人びた澄まし顔を浮かべている彼女には珍しい光景だ。

ツバキは普段、姉を『やみ子さん』と呼ぶ。基本的に誰に対しても敬語で『さん』付けだが、姉に対してもそれは変わらない。とはいえ、ずっとそうだった訳ではなく、昔は普通に『お姉ちゃん』と呼んでいたのだが、何時いつしかそれに気恥しさを感ずるようになったらしい。それ以来、ツバキは姉を『やみ子さん』と呼ぶようになった。

ちなみに、姉妹仲は変わらず良好だ。

「えへへ。いつも『お姉ちゃん』って呼んでくれたら嬉しいのになあー」

「.....は、恥ずかしいので嫌です」

「敬語も要らないんだよ？ 私はツバキのお姉ちゃんなんだから！」

「これはもう癖くせなので.....。それより、早く仕事に戻ってください！」

忙しい訳ではないが、かといつて暇ひまという訳でもない。そもそも、暇なら臨時でやみ子が駆り出される事もない。この時間に入るはずだった店員が病欠のため、ツバキがやみ子にヘルプを頼んだらしい。

その条件というのが『今日はやみ子をお姉ちゃんと呼ぶ』だそうだ。

「もう一回『お姉ちゃん』って呼んでくれたらいいよ♪」

にこにここと、意地悪をする風ふうではなく純粋な笑みを浮かべて、期待の眼差しまなざしを妹に向けてるやみ子。心なしか、作り物のはずの狼おおかみの耳——コスプレの一部だ——が、びよこびよこと動いているように錯覚させる。そうか、あのコスプレはこの店の『管理人』が趣味で書いてる小説の主人公か。

「.....判りましたよ。早く仕事に戻ってください.....お、お姉ちゃん！」

返事を聞かず、ツバキは踵かかとを返してレジ対応に向かってしまった。彼女がこんなにも動揺する姿を見るのは珍しい。年齢相応の小学五年生といった様子だ。

「.....ねえ、アサト」

「ん？」

「——私の妹って世界一可愛いよね!？」

「ウチの妹も可愛いぞ？」

「ツバキの方が可愛いもん！ この前、一緒にお風呂に入った時の話なんだけどね」



「……詳しく聞こうか」

などと盛り上がりかけていると、ツバキが慌てて戻ってきたために、この話は後日持ち越しとなった。風呂で何があったのかはさて置くとして、やはり仲の良い姉妹というのは実在するのだ。

この二人のように。

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』十三戦目をお届け致します。

今年最初の小説は久々の『そーりよくせんっ！』となりました。去年の四月以来です。やみ子のイラストを描いたので『ゾイヤみ』のサイドストーリーにしようかとも思ったのですが、せつかなので『そーりよくせんっ！』に。

この世界のやみ子はツバキのお姉ちゃんです。

そして——ロリ巨乳です。

たわむ戯れに巨乳バージョンを描いたばかりに……。

姉妹なのでケモミミと尻尾しっぽは作り物です。なので、劇中では付けてますが、挿絵では外してみました。ツバキのイラストは去年の残暑見舞い用に描いた差分を流用してます。

はだ開けているのは単なるサービスです。

ロリ巨乳姉妹とか、けしからんですね。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。このシリーズは設定が変わったり追加されたりしますが、おらかな気持ちでひとつよろしくお願いします。なにせ一年ごとに何もかもリセットされる世界なので、『サザエさん』や『ドラえもん』と同じ理屈です。

ツバキとは違った方向でロリ巨乳の魅力を出していきたいので、やみ子の再登場に二期待ください。まあ、あまり恥ずかしがらないのでいじり甲斐はないですが……。

2019 / 1 / 6 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る